

2004年3月21日

ウッドバッジ実習所「課題研修」課題

神奈川連盟横浜南央地区 第96団カブ隊副長 中川和之

課題1 当該課程の「隊長ハンドブック」を精読し、自隊の実情と違うところを列記してください。

#### 1：人数と組織

・現状は、くまスカウト6人、しかスカウト2人の8人。うさぎスカウトがゼロの2組体制。現状のまま推移すれば、来年度はくまスカウト2人とうさぎスカウト6人となる見通し。年齢層のいびつさを解消することが急務。全体としての人数増も望まれる。

・デンコーチは、前年度は2、3度、ボーイ隊から派遣を受けたが、今年度は任命もされていない。

・会計が、BVS隊と一緒に、保護者の一人に委任されているので、会計の実態が隊に分かりにくい。

#### 2：プログラムの組み立て

・夏の舎営、春の舎営は、テーマ性を持たせたプログラムを作ることが出来ているが、年間を通じたテーマ性は不十分。(今年度は、年間を通じて「発見東海道」シリーズを実施している)

・月単位でのプログラムの組み立てが、クリスマス会がある12月しかできていない。これは、組集会在実施できていないためでもある。プログラムに連続性がない。

・進歩過程のプログラムへの取り込みが十分でない。

・定期的なリーダー会議、プログラム会議、保護者会が行われていない。

・毎月のうたの設定をしておらず、ソングをプログラム内に盛り込む機会が少ない。

・大輪、カブコールを実施していない。

課題2 課題1をもとに、身近なコミッショナーと話し合い、その内容を簡潔にまとめてください。

2004年3月14日、横浜市栄区の本郷地区センターで、神奈川県連横浜南央地区の坂本國実地区コミッショナーと話し合った内容の骨子は次の通り。

#### 1：組拡について

・課題1に記述したことに加え、ようやく団が一体となって組拡に取り組む方向になり、保護者のがんばりもあってBVS年代は増えてきたが、カブ年代で抜けている年齢を埋めることがなかなか進まないと追加説明した。

・坂本地区コミのアドバイス

組拡は、団委員、各隊、保護者と、団が一体となって実施すること。団としての入団案内パンフなどを作って保護者に配ってもらうほか、一般参加のイベントに来てくれた人には、3カ月間はプログラムを送り、電話で連絡を取ったりしている団もある。BVSやCSの活動時に、隊長が保護者と話をしたり、仕事を頼んだりすることで、活動への関心もより深まる。

組拡担当に任せるのではなく、これらも、原隊の役目でもある。

## 2：会計の問題とBVS隊との住み分けについて

- ・経費がかかりにくいBVS隊と会計が一緒のため、CS隊の予算が潤沢になるというメリットもあることなど、さまざまな事情を考えねばならないことを追加説明した。
- ・坂本地区コミのアドバイス

なぜ、会計が一体化しているのか、その背景事情まで含めて分析して、検討する必要がある。合同のプログラムが多いようだ、上進を考えてもBVSとCSでは別々のプログラムが望ましい。保護者の送迎の事情もあるだろうが、カブ年代なら自分で行動も出来るのではないか。BVS隊は、積極的に保護者を巻き込んで、新しいリーダーを生み出していく可能性を持っている隊でもある。会計の問題に留まらず、総合的に考える必要があるのではないか。

## 3：プログラムの組み立てについて

- ・96団のCS隊の年プロ、進歩課程との関連表などの資料を説明し、今年度は隊長が入院・手術したことがあって、リーダー会議がなかなか開催しにくかったことなども追加説明した。
- ・坂本地区コミのアドバイス

このプログラムでは、月に2、3回、関連性のないプログラムが並んでいるだけ。なぜ組集会が必要なのかの原点を考え、スカウトの自発性を引き出すために、子どもたちも決定の場に参加したようなプログラム作りや、その過程での組集会のあり方を考えて欲しい。実習所ではさらに学べるのではないか。

隊長の事情はあったにせよ、リーダー会議が定期的に行かれないようでは、評価・反省もできないはず。大人の事情よりも、スカウト第1で考えて、毎月の定例化をして欲しい。リーダー会議が定例化しないと、プログラム立案をするリーダーがオールマイティで全部考えることになり、他のリーダーの役割が見えなくなって、リーダーの自発性も育たない。会議で、副長や副長補にパートを任せていくことで、隊長も楽になるはずである。

課題3 この実習所で学びたいことを列記してください。

- ・組集会を実施していない状態から、徐々に実施出来る状況に持っていくために、さまざまなハードルをどうクリアしていくかの具体的な手法。
- ・忙しい成人リーダーたちと、メールなども活用した打合わせ進行の具体的な手法。その実現のため、リーダー・保護者、団委員間の無理のない役割分担のあり方。
- ・継続的に評価と反省を可能にするためのプログラム運営。プログラムを作ってこなすことで精一杯にならないための余裕の作り方。年プロ
- ・カブ年代スカウトの集合前、解散後の安全確保策について。(保護者の送迎はどこまで必要かの議論の材料として)
- ・上進前の段階でのビーバー隊、ボーイ隊との連携のあり方。個々人のスカウトの顔が見えたボーイ隊への引き継ぎ。
- ・保護者との協力関係のあり方。プログラムへの巻き込み方のヒント。
- ・プログラム担当副長=自分と、隊長のよき役割分担のあり方。